三重オーストラリア・ニュージーランド協会
http://www.mieoznz.com/

ニュースレター

09/12/2
第２０号

花コンテストの審査員の庭（撮影：天野）

★三重豪ＮＺ会報　2009 年初冬号★

≪　本号の目次　≫

・オーストラリア在住の堀部さんからの便り
・〔寄稿〕「英訳源氏物語、ロイヤル・タイラー訳を中心に」藤原一昭
・〔第８回豪ＮＺ親善交流の旅報告〕伊藤俊一
・〔協会座談会からの報告〕「オーストラリア星のロマン」稲垣好孝

★オーストラリア在住の堀部さんからの便り★

堀部さんには、当協会「第１回豪 NZ 親善交流の旅」のときにお世話いただきました。ニューサウスウエルズ州カウラにあるエドワード・ガーデンのオーナーです。本便りは、堀部さんの承諾をえて、宮本忠が堀部さんのメール（平成２１年１０・１１月）を編集させてもらったものです。

エドワード・ガーデンの堀部です、ご無沙汰しています。早１０月も後数日、今年も残すところわずかになりました。お元気でお暮らしのことと思います。さて、こちらでは相変わらずの大干ばつの影響で緑地がどんどん少なくなり、立ち木がそのまま枯れていく様はこの世の終わりを思わせるひどい状況です。地球の沙漠化は確実に加速されているようです。そうした中、じっと耐えることもできず、私達を取り巻く環境を見つめなおすエコ運動をはじめました。地球の異常現象と砂漠化を防ぐには私達でできることから始めなければならないと考えたからです。オーストラリアでも砂漠化が進んでおり、先日は７０年ぶりと言う黄砂が舞い、シドニーでも朝起きたら夕焼けのような赤味の空、ダストで周りはざらざらでした。そこで、私達は緑を取り戻す自然にやさしい生活と環境改善運動を積極的に後押しすることにしました。別添ファイルはオーストラリアの自然の恵みを生かした商品の愛用を通して干ばつに苦しむファーマーを支援しよう、とこちらのファーマーがホーム・メイドした逸品をご紹介するものです。是非お力添えをいただき、治水のための緑化運動促進が広まることを願っています。今回ご紹介するのはハンドメイドのコールド製法による最高級・全身ソープですが、これ一つで頭髪から洗顔、足先まで洗える優れもので、湯上りがとても快適で驚いているものです。また、純度の極めて高い蜂蜜、コールドプロセス製法によるエキストラバージンオイルなどもこちらのファーマーが古くから丹精込めて作ってきたもので、自然に優しいものばかりです。是非オーストラリアの逸品をご紹介するサイト「ウイッシュボン」http://wishbone.ocnk.net/ をご笑覧いただければ幸いです。

三重豪ＮＺ協会　宮本　むさし(忠）様へ

お便りに感謝します。北海道ではもう雪が降っているというのにこちらは夏本番に差し掛かり、これからが水との闘いです。水不足も８年も連続ですともう異常とは言えず、このまま恒久化するのでは・・・と予測する学者もいます。それほど駆け足で地球温暖化が進行しているのでしょうか？世界的に見た場合、毎年四国程度の広さが砂漠化されており、このままではその速度を速めそうです。

中国はオーストラリアに対し積極的に外交を進め、アジア外交の覇権を握ろうとしています。これまで日本とオーストラリアは貿易バランスも良く良好な関係にありましたが、最近の外交政策の遅れで日本のカゲが薄くなってきているのを現地生活の中で感じます。私などは細々と果樹園を営んでいるだけですが、カウラと言う土地は特殊なところ、是非この地から情報発信をしていかねば・・と思っているものです。もう何年も前になりますが、この地カウラで日豪交流協会の年次総会が開かれ、

当園のレストランがその最終日のレセプション会場となりましたが、その時元北海道知事さんもお見えいただき、楽しい時を過ごしました。是非こちらの方との交流を含め、ご来訪の計画があるようでしたら、お声をかけてください。大変嬉しく思います。

ここ、内陸のセントラルウエストと呼ばれる地方は今生産大地として動き始め、日本へはラーメン用の小麦粉やアスパラガス、トウモロコシ、ジャガイモなど、数多くの農産物を輸出していますが、日本の食糧自給率 41%は世界的に見ても低すぎ、何とかしたいと考えているものです。当園のサイトは http://www.holidayfarm.com.au/です。また、オーストラリアの、と言うよりこの周辺で手作りでこだわりの商品を作っている方を紹介していくサイト　http://wishbone.ocnk.net/　も併せてご覧いただければ幸いです。

カウラよりエドワード・ガーデン（江戸和人雅園）　堀部　洋保

三重豪ＮＺ協会　代表　宮本　忠様へ

日豪交流協会の総会の最終日（２０００年)、落語家を交えての楽しいひととき、三重県の代表の方がおられたと記憶しています。また、カウラではじめてのピースマラソンに際しては、貴協会から、お力添えをいただきました。地元プライムテレビが放映する中、盛大に催すことができました。その日の夕刻のテレビニュースでも放映され、成果を収めることができました。イベント開催保険や大会ゼッケン作り、会場設営など、大変な持ち出しでしたが、喜んでいただき、これが定着すれば良い、と願ったものです。ところが翌年、同じ頃になると、今年も堀部さんよろしく、・・・と市役所までがすべて当方任せ、自分から動かない国民性ではありますが、２年連続で２００万円近い個人の持ち出しもできず、残念ながらその後まだ開催にいたっていません。こちらから大いに情報発信し、そうした中で外部から刺激して村社会からの脱皮を図ることがカウラには必要、と言われています。堀部洋保カウラよりお便りします。ご意見、アドバイス等いただければまことに幸いです。

カウラよりエドワード・ガーデン（江戸和人雅園）　堀部　洋保

★〔寄稿〕「英訳源氏物語、ロイヤル・タイラー訳を中心に」藤原一昭★

著者紹介：藤原一昭さん。オーストラリアのクイーズランド州ゴールドコーストで平成４年１月、フジ国際幼稚園開園。日豪交流に尽力。文学、俳人としても活躍。松阪市出身。

オーストラリア国立大学名誉教授、ロイヤル・タイラー訳の源氏物語は、２００１年完成を見ました。タイラー教授は、１９９０年から２０００年までオーストラリア国立大学アジア研究学部日本センター所長を勤め、この間に８年の歳月をかけて源氏物語を翻訳されています。昨年２００８年は、紫式部が源氏物語を書いてから１０００年の節目にあたりました。源氏千年紀の記念事業が行われ、改めて様々な角度から光が当てられたようです。私もこれを機会に書棚から３種類の英訳源氏を取り出し「桐壺」の書き出しや「須磨」「明石」又宇治十帖の「浮舟」など、ハイライトを読み比べて愉しみました。一番古い英訳源氏は、アーサー・ウエーリーの手になるもので、１９２０年代半ばから１９３０年代の初めにかけて随時翻訳出版されたようです。このウエーリー訳によって『源氏物語』は、英国の当時の文学サークルを通じて、広く欧米各国に知れ渡りました。ウエーリー訳源氏は、忠実な翻訳ではないと言われていますが、流麗な英文で１９２０年代を代表する英文学として記憶されているそうです。１９７６年には、エドワード・G・サイデンステッカーによる全訳源氏物語が出版されています。その年、サイデンステッカーは、ミシガン大学にいて源氏物語を講義していました。私は、たまたまミシガン大学にミシガンメソッドとして知られる英語教育法を学ぶために滞在しており、強く印象に残っています。後ほど本人より直接、日本文学の翻訳についてお話を聞く機会を持ったためかもしれません。私の手元にあるタイラー訳源氏は、ペンギンブックス社の２００３年版で、豊富な挿絵と詳しい脚注が付いています。

桐壺の書き出しの一文、「いづれの御時にか。女御・更衣あまたさぶらひ給ひけるなかに、いと、やんごとなき際にはあらぬが、すぐれて時めき給ふ、ありけり。」の英語訳を以下にご覧下さい。三者三様の翻訳がなされています。私のように原文には、歯が立たなくともストーリーを愉しんでいただけると思うのです。

１．At the Court of an Emperor (he lived it matters not when) there was among the many gentlewomen of the Wardrobe and Chamber one, who though she was not of very high rank was favoured far beyond all the rest; (A.W)

２．In a certain reign there was a lady not of the fist rank whom the emperor loved more than any of the others.(E.S)

３．In a certain reign (whose can it have been?) some one of no very great rank, among all His Majesty’s Consorts and Intimates, enjoyed exceptional favor, (R.T)

正宗白鳥もウエーリー訳によって源氏の魅力に目覚めたと告白しているそうです。

ロイヤル・タイラーについて少しご紹介いたします。彼は、１９３６年ロンドンに生まれ、イギリス・アメリカ・フランスで育ちました。ハーバード大学で修士をコロンビア大学で博士号をとりました。アメリカの著名な日本文学の研究家、ドナルド・キーンに師事し日本の文学を研究、謡曲に関する翻訳でしられていました。現在は、大学を退官しキャンベラ郊外に住んでおり、２００７年には、東京大学でも講演をされています。タイラーは、１９９３年源氏翻訳のプロジェクトに取り掛かりました。オーストラリア研究評議会からの支援が得られたことや国際交流基金など日本政府の様々な支えで 16 ヶ月間日本に滞在が可能になったことなど、感謝をこめて言及されています。彼の出版社であるペンギンブックスのニューヨーク支社が全面的な支援に働いたことも預かって力があったようです。タイラー訳の源氏物語を開いてすぐ気が付くのは、読者のために丁寧な訳注が付けられていることです。翻訳において特に意を用いたところは、原著のリズムや調子を生かそうとしたことで、息の長い文章は、長文に訳し、分別や上品さを生かしたそうです。物語に含まれる７９５の歌は、何百年もの間、歌よみの手本と考えられていたことも承知しており、歌の翻訳に工夫が凝らされています。五行詩に訳すなど試行錯誤の末に、五・七・五と七・七に分けて、元歌に沿って二行に翻訳することに落ち着いたようです。

源氏物語は、シェイクスピアの諸作品がそうであるように、大学で研究され、音楽・漫画・オペラ・歌舞伎などあらゆる種類の分野で取り上げられています。この物語は、日本語を知らない人々にも広く知られ、アメリカでは、オペラに仕立てられてもいます。またどこの大学でも、当然のように講義されており、最早日本だけのものではないのです。ロイヤル・タイラーは、日本の文学を世界に紹介した功績を認められ、2007 年には、国際交流基金賞を、2008 年には旭日大綬章を授与されています。

★〔第８回豪ＮＺ親善交流の旅報告〕伊藤俊一（元協会副会長）★

旅行日　平成２１年３月２日（月）～３月１４日（土）１３日間

機内２泊、アコモデーション１０泊

１日目（３月２日）Ｍ夫妻と小生、伊藤はセントレアの東横インから、バスで空港へ向かう。ＴさんとＡさんと合流する。５人全員揃った。７時４０分搭乗手続きをする。９時４０分、予定通りシンガポール航空で出発する。シンガポールまで約６時間の飛行という。現地時間の１５時１５分に着いた。快晴であったが、気温３２℃は暑かった。シンガポール空港は広い。美しくて、綺麗である。喫煙所は屋外なので暑いが、空港内は快適であった。ニュージーランドのクライストチャーチ行きは１９時４０分である。１８時４０分から搭乗手続きが始まった。身体検査と手荷物検査である。私は上着、ポシェット等をベルトコンベアーの上に置き、その荷物と共にゆっくり歩いて進んだ。そして検査を終えた上着を着た。ポシェットも腰につけた。しばらくして、アレ！身体検査のゲートを通らなかったことに気がついた。Ｍさんに「キミの人生は裏道ばかりだったから、それでいいんだよ。」と言われた気がした。

２日目（３月３日）クライストチャーチに現地時間１０時３０分に到着する。入国審査官に日本人女性が一人いた。これはサプライズであった。空港の出口付近の両替所でニュージーランドドル（$）に代えた。$１は４９円余であった（トラベラーズチェック）。長時間エコノミーシートでベルトを着用していたので、外へ解き放たれた感は嬉しいかぎりであった。空港内のレンタカー事務所で予約していた８人乗りの自動車で一路カイコウラ（Kaikoura）へ向かう。ドライバーは運転歴４５年ＮＺ．２回目のＴさんである。ガイドとナビゲーターはクライストチャーチ在住経験のあるＹさんである。 途中、果物屋で買い物、ワイナリーで試飲（$５）したりして、楽しみながら、これも道沿いにある喫茶店風の店で遅い昼食をとる。トマトスープとパンで$９であった。

１７時頃、無事カイコウラに到着する。海辺特有の潮の香りが車内に充満し歓声が上がる。宿はパノラマモーテル、その名の通りカイコウラの海、山、町がパノラマ的に眼前に広がっていた。夕食の買い物にＴさん、Ｙさん、Ａさんが行ってくれる。

３日目（３月４日）７時４５分、Ｔさん、Ａさんがホエールウオッチングに出かけた。

Ｙさんがカイコウラ駅まで送られたが、それにしても帰りが遅く、Ｍさんは気が気でなかった。そんな心配をよそに３人が笑いながら帰ってきた。ヤレヤレとホッと！したのはＭさんである。ゆっくり事情を聞いてみると、時刻どおりに集合場所へ行

ったにもかかわらず「船はもうとっくに出ました」とのこと。腕時計もさることながら、体内時計には滅法自信があるＴさんである。時差も調整したにもかかわらず、１時間遅れとは解せない。

早い話が、失敗の原因はサマータイムのため１時間のズレが生じたのである。因みに、ニュージーランドではサマータイムとは言わないという。夏時間制・デイライト・セイビング（Daylight Saving）といい、年により期日は毎年変動し一定ではない。

結局、１３時３０分の乗船を予約して一件落着。時間ができたので、カイコウラ海岸のアザラシのコロニーへ行く。丘に登って南半球の太平洋を眺め景色を満喫する。１２時過ぎ、今度は遅れないようにカイコウラ駅へ行く。駅で鯨の刺繍の帽子を買う。＄３０が＄２８にしてくれた。中国製だった。

私は方向音痴で東西南北が分からないので磁石（方位計）を買う。＄３５を＄３０にまけてもらった。時計も持っていないので、これも１個＄２０、これは定価である。

夕食は道端で開業しているＢＢＱで女性陣のため一日遅れの雛祭りをした。

４日目（３月５日）カイコウラ半島の展望台へ車で行く。カイコウラの北東に連なる２０００㍍級のカイコウラ山脈の雄大な景観は圧巻であった。続いて、カイコウラの海岸道路を拡張するに際し大木の幹部分を利用して男女の像を彫刻したオブジェを鑑賞する。

モデルはカイコウラにゆかりのあるイギリス人という。そのあと、カイコウラミュージアムへ行く。鯨に関するもの、昔の生活道具、さらには監獄施設の実物まであった。次に、１９５８年に発見されたという洞窟（Cave）を見学する。マオリリープケーブといい、２００万年前のものと説明されたが想像がつかない。

きょうの目的地はアカロア（Akaroa）である。途中、シラカバの木があるところで１４時半頃～１５時頃まで、遅い昼食をとる。アカロアの宿に着き、町へ出る。夕食はワインとおいしい海鮮料理を賞味し満足する。アカロアの町は静かで上品な感じがした。年配者が多いように思えたがニュージーランドの人々は人生を楽しむと言うか、エンジョイしている。みな余裕のある生活をしているように思う。それに比べ「我々日本人はなんて貧乏性なんだ」とつくづく思った。民族の性格だから仕方のないことと諦めざるを得ないのかも？

５日目（３月６日）朝７時、アカロアの町を少し散歩する。ゴミ収集車が勢いよく走り回っていた。人けが無いので勢いよく走るのだろうが、歩行者は余程注意しなければならない。朝７時といえば、日本ならまだ３時である。未明とはいえ、まだ真っ暗であると想像したりして歩く。

朝食後、アカロアの海辺を散策し、インフォメーションへ行く。その前にＡＮＺ銀行があったので、私は両替をしょうと思ったが、パスポートが無いことに気がついた。いつも首に掛けている袋もない。「これはえらいことだ。大変だ！」しかし、パスポートのコピーを持っていることに気がついた。それでダメなら仕方がないと思いつつ、銀行の窓口に出すとＯＫの返事。ほんの少し円安に振れていた。

さあ、それからが大騒動であった。モーテルへ帰りみんなに協力願いパスポート探し、約２０分後、私のベットと窓際のすき間に落ちていたのを、Ｍ さんが発見。以後、パスポートは肌身離さず細心の注意を心掛けるようになったのは当然である。

アカロアのヘリテージパークへ行く。私を除く４人は山頂を目指して登山した。下山後、麓で待っていた私にＴさんは「高い所だけで景色はここと同じですよ」と慰めて頂いた。その心遣いに内心大きな感謝をした。小高い丘で昼食をとる。ガス欠の心配からＴさんとＡさんが給油に行ってくれた。５５リットル給油したとのこと。

このアカロアは最初フランス人が入植した地であるとＭさんから教わる。そのフランス人が経営する店舗でカマンベールチーズ１０個購入する。＄５０であった。

６日目（３月７日）朝７時、アーサズパス（Arthurs Pass）へ発つ。車のなかで誰かが「モーテルに忘れ物は無いでしょうね」と言った。私は一瞬、ドキンとした。きのう買ったカマンベールチーズ１０個を冷蔵庫に入れたまま忘れてきたのだ。ヘマをするのは私ばかりである。やむなく引っ返していただき、無事リュックの中に納まった。

しかし、良いこともあった。引っ返して来ると、町の広場でフリマーケットが開催されていた。Ｍさんは手づくりの素敵な帽子を買われた。私が忘れ物をしたお陰である？私はこれを「チーズ効果」と内心で称した。勝手な解釈である。クライストチャーチに近づいてきた。１２－１３年前Ｍさんが研究に励まれたリンカーン大学に立ち寄る。だが、土曜日のためお休みであった。大学を後にして途中のダーフィールドという町で昼食をとる。

それからは、一路アーサーズパスに向かう。峠のためか、小雨が降ってきた。１６時半頃アーサーズパスに着く。インフォメ

ーションでアーサーズパスの環境を勉強したお土産を買ったりする。夕食は１３年前私が訪れ一泊したことのあるレストランでとるが、当時の面影はまったく無かった。

７日目（３月８日）アーサーズパスの一夜が明ける。６時半頃起床する。外へ出てタバコを吸いにゆく。ウグイスの下手な鳴き声が聞こえる。いや、下手ではなく、英語で鳴いているのかも知れない。多少、肌寒い。朝食後、私以外はトレッキングに出かける。１０時に出発して１１時半帰着。ここは一泊で終了。クライストチャーチへ行く前にアーサーズパスの鉄道駅舎を見学する。無人駅のため出入りは自由である。

そして、またＴさんのご好意により、落差１０７ｍの大滝を見てきたから、是非見てもらいたいと車で滝の見える所まで案内していただいた次第である。

さあ、クライストチャーチ（Christ Church・略して CHCH）へ出発である。山越えの途中、キャッスルロック（Castle Rock）という絶景地を楽しむ。とにかく雄大そのものである。視界３６０°、２０００㍍級の山々に囲まれたニュージーランド特有の山肌が訪れた観光客をうならせる。その谷底を完全舗装道路が整備されている。商業施設や広告などは一つもない。豊富な自然だけであるのが、素晴らしい。

１７時頃、クライストチャーチに着く。宿はリカトンモーターロッジで５泊する予定である。メンバーが５人のため２ベッドルームとツィンルーム（トイレ・シャワー室がバリアフリー）の４ツ星のモーターロッジであった。夕食は近くのパックンセイブ（スーパー）で調達した。

８日目（３月９日）朝、クライストチャーチ・シティーセンターへ行きレンタカーを返却する。エイボン川畔の食堂で昼食をとる。午後はショッピングをする。衣料品店に入ったにもかかわらず、どういうわけか、その店でハンド・クリームを買ってくれと勧められた。

５個買って貰えば１個サービスするという。私は１２個買い、発送を依頼した。ほかの方も買われた。たちまち在庫が無くなった。もっと欲しいと言うとクイーンズタウン（Queenstown）の店にはきっとあるに違いないと電話をしたら、その店もきょう売り切れたと言う。試供品付で単品買いをされた人もいた。店員さんはＫ出身のＴＹさんといい、CHCH 在住２０年とのこと。新婚旅行に来てＮＺに魅せられたという話であった。

次に、大橋巨泉の店、ＯＫショップへ行く。ここは商品の値段は少々高いが、日本人店員が多いから日本語でコミュニケーションがとれるので便利である。私はキウイフルーツのジャムやクッキーなどを買い発送を依頼した。この日は１７時半頃のバスでモーテルに帰った。

９日目（３月１０日）９時のバスでリトルトン（Lyttleton）へ行く。Ｍさんに教えて頂いたお話によると、英国人が初めて上陸した地で、ここの峠を越えてクライストチャーチを切り開いた由緒ある所とのことである。急な坂道を登って灯台と時を告げるタイムボール（報時球）ステーション（１８７５～７６年建築）を見学する。小高い山の上にあるので展望が良い。眼下に見えるリトルトン港には豪華客船が入港していた。オランダ船籍である。数百人の人が下船していたのは、おそらくクライストチャーチの花フェスティバルを見に来たのだろう。ここリトルトンの名物はフィッシュ＆チィプスという。それで昼食は全員フィッシュ＆チィプスで済ます。安上がりな昼食であった。

昼食後、ゴンドラで山頂の展望台へ行く。東京の女子高校生の団体が来ていた。風が強かったが景色は良かった。クライストチャーチ・シティーセンターへ戻りショッピングする。私はリュックを新調した。自分のみやげでもある。

話は変わるが、クライストチャーチのバスは１回＄２．８であるが、２時間以内ならどこへ行こうが、何回乗ろうが、その切符でＯＫである。これは新発見であった。

１０日目（３月１１日）９時のバスでクライストチャーチのハグレー公園（Hagley Park)へ行く。クライストチャーチはガーデンシテイの異名がある通り美しい公園が多くある。中でもこのハグレー公園の面積は１８２㌶(東京ドーム３８個分)という。この公園の一角に植物園があり（面積は日比谷公園の２倍)、そこが花フェスティバルのメイン会場だった。ゲートには既に２００㍍近い行列ができていた。１０時の開門とともに入る。

体育館ほどもある大きなテント張りの施設が１０基ほどあった。スケ～ルが違う。驚いた。会場には花の展示、花のアート、庭園の見本は言うにおよばず、ガーデニングの諸道具の販売や食品の試食コーナーがあった。コーナーといっても１００社ほどが参加しており、日本からはキューピーマヨネーズが参加していた。食品の試食コーナーは食べ放題であった。お陰さまで昼食は全員試食品で満腹になりそれで済ました。

会場を出て、クライストチャーチのシンボル、大聖堂（カセドラル・The Cathedral）で一休みをする。この大聖堂の中も花

で飾られ音楽会が行われ、街をあげての大イベントでした。

１１日目（３月１２日）きょうはクライストチャーチの花フェスティバルの家庭花園の見学である。小型バスがモーテルまで迎えに来てくれる。花フェスの入賞者の家庭の庭を見学する小ツアーである。庭の花々の手入れの良さに驚いた。家族全員がガーデニングに熱心であり、協力的でなければ出来ない庭園であることを痛切に感じた。小じんまりした日本の住宅のような家もあり、テニスコートがあるほどの庭園もあったが、なによりも花を愛でる気持ちがなければならないと感じた小ツアーであった。

午後はクライストチャーチ・シティーセンターへ行き、有名なモナ・ベイル邸（Mona Vale）で優雅な午後のひとときを楽しんだ。昼食（ランチ）はエイボン川のほとりに席をとり、エイボン川の舟遊びであるパンテイング（Punting）を見ながらの食事は正に優雅のひとことであった。

そのあとは、大聖堂前の露店を見たり、適宜ショッピングなどをしてモーテルに帰り南十字星の下で最終日の夢を結びました。

楽しい園芸（撮影：高木）

史上初の２協会賞（撮影：天野）

楽しい園芸（撮影：天野）

花いっぱいいっぱい（撮影：天野）

１２日目（３月１３日）８時に朝食をとる。シャワー、ヒゲ剃りを済ます。９時１５分、小型バスでクライストチャーチ空港へ行く。運転手はニュージーランドに職をえた、オーストラリア人で、退職後ニュージーランドに定住して、この仕事をしているとか。

クライストチャーチを１１時５０分発→シンガポールに１６時５０分着。乗り換えのためシンガポール空港内で約８時間、何もせずに、無意味な人生を過ごす。

日付けが変わって３月１４日の午前１時００分、シンガポール空港を出発→セントレアに午前８時１５分着。９時頃、各自それぞれ家路につく。全員無事が何よりでした。

★〔協会座談会からの報告〕「オーストラリア星のロマン」

稲垣好孝（四日市市立博物館プラネタリウム解説員）★

四日市市立博物館プラネタリウムでは、２００８年１０月４日から２００９年１月２５日まで、「四日市・シドニー姉妹港提携４０周年　オーストラリア星紀行」という番組を投映しました。この番組は、当館の職員が、テーマの選定、資料の収集、シナリオの作成、音楽の選曲、星空の演出など、自主制作した番組です。番組広報の一環として、宮本先生にご相談し、三重オーストラリア・ニュージーランド協会のＨＰでもＰＲさせていただきました。

私は、三重大学の卒業生で、本協会の会長をされてみえる宮本先生の研究室に在籍し、地方行政などを学びました。卒業後は、四日市市役所に就職しました。宮本ゼミで学んだことを少しでも生かせるようにと、「人にやさしく、地球にやさしく」というモットーで、市民の方と接してきました。また、大学時代に学芸員の資格を取得していたこともあり、４年目からは四日市市立博物館プラネタリウムに異動になりました。高校時代には、天文部に在籍していた経験を生かして、プラネタリウムの仕事にはやりがいを感じて取り組んでいます。

そんな中、２年程前から、２００８年に四日市港とオーストラリアのシドニー港が姉妹港提携４０周年を迎えるのを記念しようと、上述の番組の制作に取り掛かり、無事１０月から投映を始めました。座談会では、その番組の一部を、映像やパワーポイントを使って紹介しました。

まずは、現在の四日市港の様子です。国道２３号線沿いにある波止場やコンビナートの工場の様子、四日市港ポートビルなどを紹介しました。四日市港ポートビルの周辺には、シドニー港との姉妹港を記念したものがたくさんあります。例えば、「オ

ーストラリア記念館」や「シドニー港通り」、「シドニー港公園」があり、その公園の前にはカンガルーの親子の像のモニュメントもあります。

次に四日市港の歴史を紹介しました。四日市港は、水深が深く、伊勢湾の奥にあるため波も穏やかで、古くから天然の良い港として栄えてきました。幕末から明治初期にかけては急激に船の出入りが増え、明治３年、東京から定期航路が開通したことによって、伊勢湾最大の港となりました。

幕末に起こった大地震のため、川の堤防が壊れて港にたくさんの土砂が流れ込み、船が入ることが難しくなりました。当時、中納屋町で回船問屋を営んでいた稲葉三右衛門はこの様子に心を痛め、自らの財産を投げ打って、港を作り直すことを始めました。しかし、工事はなかなか進まず、台風でまた壊れたり、資金が底を尽きたりと大変な苦労がありました。しかし稲葉三右衛門は四日市港を良くしたい一心で、ついに明治１７年、１２年の歳月をかけて港を完成させました。これが前の四日市港（旧港）です。そのおかげで、港に大型船を呼び戻すことができました。その後明治３２年には本格的な国際貿易が始まり、新しい港ができました。また、昭和２２年には全国で初めて羊毛の輸入がはじまり、その後世界最大の羊毛輸入港となりました。当時、世界最大の羊毛輸出港であったのがオーストラリアのシドニー港でした。そこで、世界で一番同士の四日市港とシドニー港が、昭和４３年に姉妹港の提携を結ぶことになったのです。

シドニー港は、オペラハウスを代表に、その美しい景観から「世界三大美港」の一つとされています。また、シドニー港の南には、ボタニー湾という湾があります。ここには、四日市港との友好を記念して、２００１年に、ボタニー湾を一望できる公園に展望台が立てられました。これからオーストラリア・シドニーに旅行に行かれることがあれば、ぜひ、ボタニー湾の四日市ゆかりの展望台も訪れてみてください。

オーストラリアやニュージーランドの国旗には、「南十字星」が描かれています。南半球の星空は、三重県からでは見ることができませんので、座談会では、エアーズロックで撮影された「天の川（銀河系中心部分）」や「南十字星」「大マゼラン雲」の写真などご覧いただきました。

また、南半球の星空は、天文学者たちも注目していることを紹介しました。特に、オーストラリアにある天文台では、「カンガルー」と呼ばれている望遠鏡を使い、宇宙からやってくる高エネルギー電磁波のガンマー線を利用して星を観測しています。ガンマー線は人間の目では見えない光線ですが、「カンガルー」の特殊な装置で、宇宙の中で激しい活動をしてガンマー線を出している星を捉えています。この望遠鏡は、ウーメラという場所にあり、オーストラリアの天文学者だけでなく、日本人の天文学者も観測や研究に参加しています。

最後に、２００９年は世界天文年であることを紹介しました。イタリアの科学者ガリレオ・ガリレイが初めて望遠鏡を夜空に向け、宇宙への扉を開いた１６０９年から、４００年の節目の年。国際連合、ユネスコ（国連教育科学文化機関）、国際天文学連合は、「世界天文年（International Year of Astronomy：略称 IYA）」と定めています。

世界天文年の目的は「世界中の人々が夜空を見上げ、宇宙の中の地球や人間の存在に思いを馳せ、自分なりの発見をしてもらうこと」です。皆さんもまた機会がありましたら、四日市市立博物館プラネタリウムで、宇宙や星のお話を楽しんでいただければと思います。（２００９年３月２０日報告）

編集後記

稲垣が初めて担当する会報でしたが、発行がたいへん遅れてまことに申し訳ありません。なんとか１１月中に、と思っていましたが、１２月にずれこんでしまいました。次号からは、もう少し要領よく進めさせていただきます。また、「南半球の星空散歩」と題して、南天の星座なども連載でご紹介できればと考えております。これからも、どうぞよろしくお願いいたします。（稲垣）

発行 三重オーストラリア ・ニュージーランド協会
発行責任者 宮本忠 ＴＥＬ／ＦＡＸ ０２３５－２６－９１２５
〒９９７－００３５ 鶴岡市馬場町１４－１ 東北公益文科大学大学院
Ｅメール miyamoto@koeki-u.ac.jp
※ この会報にある文章・写真の無断掲載はご遠慮下さい。